主に感謝！

詩編136:1～26

2022/7/22

日本人の美しい性質に、感謝を忘れないことがあります。例外はどこにでもありますが、一般に日本人は受けた恩、恵、親切をいつまでも覚えていて、いつかそれに報いたい、恩返しをしたいと思い続けるのです。だから、日本人は恩知らずな人を嫌い、義理を欠く人を軽んじます。どこの民族にもみられるものだと言えばそれまでですが、日本民族にはそれが強いのです。

それなのに私たちには、小さな事柄に対しては良く感謝をし、ありがとうございますと言いますが、大きなことには気づかずに無頓着なこともあります。あまり親しくない人には、ありがとうと言うのに、近しい人の親切には無感覚な場合もあります。新しい高級車を下さる人がいれば、誰でも喜んで感謝するでしょう。しかし、子どものころから、あらゆる世話と面倒を見てくださった親には、あまり感謝をしないのが普通です。親に感謝をあまりしないのが、現代日本人の特徴でもあります。

神様に対しても同じです。100 万円の宝くじが当たったら、たとえ神様は何にもしておられなくても、神様ありがとうございますというかもしれません。しかし、それがなくては 10 分も生きて行けない空気のために、感謝をする人はあまりいないでしょう。おいしい食べ物をおすそ分けしてくださった人には、何回も頭を下げても、穀物を稔らせ果物を与え、肉や魚を食べられるようにしてくださる神様に、お礼を言う人はあまりいないのです。

神様に対する最も悪い態度は、神様の恵みと祝福とお守りを平然と受けて、無視してしまうことです。自分が、あたかも自分ひとりの力で生きているかのように、振る舞うことです。いつも自分の近くにいてくださり、自分が気付いているときも気づかずにいるときも、守り、助け、与え、恵んでいてくださる神様を、改めて意識し、感謝を奉げていきましょう。一つ一つの恵みを思い起こし、感謝をしましょう。自分の気持ちが沈みがちな時、神様の恵みを思い起こし、神様に向かって顔を上げ、感謝を奉げましょう。悲しみに暮れるとき、神様の祝福を数え上げ、神様に目を注ぎ、感謝の歌を歌いましょう。ちょうど、詩編の作者がやったように、神様がしてくださった一つ一つのことを思いだし、声に出して感謝をささげましょう

Ⅰ.　あらゆる良いもの、良い出来事に感謝する　　感謝は礼拝の大切な要素ですが、ある意味で、賛美よりも低い位置づけとなります。賛美は、たとえ私がいなくても、あるいは私が滅ぼされ、地球が焼かれたとしても、神様は絶対のおかたとして、賛美されるべきなのです。ところが感謝は、あくまでも感謝すべき者、つまり私がいて、その私にとって素晴らしいことをしてくださったから、感謝するものなのです。賛美は神様が神様だから奉げるもんですが、感謝は、神様が素敵なことをしてくださったからするものなのです。

私たちは、神様がどんなに多くの素晴らしいことをしてくださったか、毎日してくだっているか、考えることも思い出すこともしません。落ち着いて、仕事の手を休めて、雑然として人間世界の喧騒から逃れて、神様が私たちにしてくださったこと、してくださっていることを、改めて探り出し、数え上げ、それら一つ一つのために感謝をささげましょう。美しい自然環境の中に、私たちが置かれていることを感謝しましょう。それよりもまず、私たちに命が与えられていることに感謝しましょう。しかもその命が神様の姿に似せて造られているこ

とに、大いに感謝しましょう。そのために私たちは、本能的に善を愛し、美を愛で、調和を尊んで生きることができ、神様がお造りになったものを美しいと感じ、美味しいものをおいしいと感じられるのです。また、その命が守られ、続くように、衣食住も与えられていることを感謝しましょう。優しい親がいて、可愛い子供たちが与えられていることにも感謝しましょう。互いに心置きなく付き合えるく親族がいることにも、良き友人たちがいることにも感謝しましょう。

有能な政治家たちがいることにも感謝をしましょう。何だかだと言っても、日本は安定しています。あまり大騒ぎをするほどの国難には、遭遇していません。たとえ困難なことが起こっても、最悪をみないで解決できてきました。日本人の中には多くの犠牲的精神を持った人々がいて、自分を捨てて国家のために、あるいは人々のために立ち上がってくれました。

日本は、安心して子育てができない国と責められて、人口の減少も非常な勢いで進んでいるのは確かです。でも、日本ほど安心して子供を育てられる環境も、あまりありません。世界中では、日本の何倍もの劣悪な環境の中で、子育てが行われています。私たち後期高齢者が生まれたころの日本は、今に比べるとまさに劣悪極まりのない環境でした。それでも、団塊の世代という人たちは、ベビーブームの中に生まれていたのです。私たちは何事にも欠点や短所を見つけ出し、不満を言いますが、感謝することも忘れてはならないのです。不満を募らせる対象ではなく、感謝できる事柄を見つけ出そうではありませんか。

Ⅱ.　贖いのお働きに感謝しよう　私たちが最も感謝をすべきは、神様の救いのお働き、贖いの御業です。神様は、どうして罪を犯したみ使いたちを救おうとなさらずに、み使いよりも機能的に低い人間を、罪の結果の滅びから救おうとなさったのでしょうか。聖書にはその理由が書かれていませんから、断言はできないのですが、牧師は、人間が初めから愛の対象として造られていたことに、起因するのではと考えています。

神様は、初めから人間をその働きの為ではなく、神様の愛をお受ける対象となるように、つまり、神様の愛玩動物となるように、造られていたのです。一頭の高級肉牛の値段は、よくわかりませんが100万円を超えるのでしょう。家に飼っているペットの猫はせいぜい数万円です。でも、もしも彼らが死んだなら、どちらのためにより深く悲しむでしょう。客観的な価値によってではなく、主観的な感情によって行動が決まるのです。

神様は、とにかく罪を犯して永遠の滅びに向かって歩み出した人間を、何が何でも救おうとなさったのです。私たちが価値ある存在だからではなく、神様の愛の対象だったからです。私たちはそのように造られているのです。罪を犯してすっかり沈んでいるとき、思い出しましょう。私たちは愛されているのです。それが事実です。この愛は私たちの愚かな行動によって変わることがないのです。

その愛のために、神様は人間の救いの壮大な計画を立て、実行に移して下さいました。イエス様が神の位を捨て、人間の姿を取り、この世界に来て下さったのは、私たちが愛されているためです。イエス様が人間として、ありとあらゆる経験を積み、苦しみも悲しみも、痛みも挫折も体験なさったのは、私たちが愛されているためです。イエス様が、不当な裁判で一言も発せられずに耐え忍ばれたのは、私たちが愛されているからです。いばらの冠を耐え、平手打ちも拳うちも、棒で叩かれることも、唾をかけられることも、ののしられ嘲笑されることも、ずっと耐え忍ばれたのは、私たちが愛されているからです。重い十字架を背負わされて遠い道をお歩きになったのも、両手両足を釘で打ち抜かれたのも、わき腹を槍で貫かれたのも、すべ

てみな、私たちが愛されているため、私たちの救いのためなのです。私たちは愛されているのです。自分が無価値に思えるとき、自分で自分が嫌いになるようなとき、他人から拒絶され排斥される時、思い起こしましょう。私たちは天地創造の主から愛されているのです。思い出して、感謝の祈りを奉げましょう。精一杯、感謝の気持ちを表しましょう。

Ⅲ.　感謝の気持ちの表現　A　気持ちは素直に表現するに越したことはありません。感謝の祈りを奉げましょう。大雑把に「すべてを感謝します」と言って終わるのではなく、時には、一つ一つの事柄、出来事も思い浮かべ、具体的にそれらのために感謝を奉げましょう。それによって、いよいよ私たちの感謝が強くなり、神様を慕う気持ちが高まります。そして、感謝の行動も起こしましょう。口先だけの感謝ではなく、行動をもって感謝しましょう。本当の気持ちには行動が伴うものです。

多くの人は、自分の能力を神様に捧げて、感謝を表現しました。もっと多くの人は、自分の人生を奉げて感謝を表しました。ペテロもヨハネもヤコブも、みんな自分を奉げたのです。さらに富を奉げて仕え、感謝の気持ちを表現した人も少なくありません。ザアカイは、自分の財産の半分を奉げ、さらに不正な取り立てをしていたら四倍にして返しますと宣言しました。これも感謝の表現であり、異なった人生を歩みだそうとする、決意を現したものでした。

いつも話題になるエホバの証人や、統一協会の献金が悪いのは、自主的な献金ではなく、強制的に献金をさせられるからです。彼らは決して強制はしていないと言いますが、洗脳をしています。洗脳によって、精神的に奉げる以外の道を閉ざされてしまうために、それは強制の献金になるのです。

旧約時代の生き方をしていた人たちは、収入の十分の一を奉げて、神様への感謝を表現していました。しかし新約聖書の時代には、律法に決められた捧げもの以上に、自由に、自分にできるだけの献金をして神様に仕え、感謝なお表現としました。土地や不動産を売って、教会の働きを支援した人たちがたくさん起こってきました。パウロを発掘して、使徒たちの仲間に取り入れるのに努力をしたヨセフも、キプロスにあった自分の土地財産を売って、貧しい人々を助けたために、バルナバ、すなわち「慰めの子」というあだ名さえもらいました。それが新約聖書の、自主的な感謝の表現の仕方の一つでした。

リビングストンという、アフリカ宣教のために人生を費やした偉大な宣教師は、子どものころ礼拝会に出席したとき、お金の持ち合わせがありませんでした。それで、献金の皿が回って来た時、その皿の上に跪いて祈ったそうです。「神様。私は私の人生を奉げます。」 彼は小さな少年でしたが、最も尊い捧げものをしたのです。それは、彼の最大の感謝の表現でした。私たちはいま、どのような感謝の表現をすることができるでしょうか。

Ⅳ.　感謝の気持ちの表現　B　リビングストンは、お金以上のものを奉げました。今の私たちからすると、彼の働きは、イギリスの植民地主義にのっかったものであり、厳しい批判の対象になるでしょう。しかし、彼の献身に間違いはなかったのです。植民地主義という西欧キリスト教国の悪い政策の中でも、良いことが行われ、彼を通して多くのアフリカ人が福音を聴くことができたのです。

福音を語ることほど素晴らしい感謝の表現はありません。神様の愛を伝え、神様の救いのすばらしさを教えるのです。イエス様が命を賭けたお働きに、私たちも命を賭けることこそ、最大の感謝の表現なのです。

自分のため、自己獲得のためではなく、自分を捨てて主に従うのです。イエス様は私たちのために命を捨ててくださいました。私たちもイエス様の栄光と愛のために、私たちの命を捨てるのです。

　私たちが感謝の表現として福音を語るとき、神様の贖いの働きが人々の中に輝くのです。神様の救いのお働きは、私たちが語らなければ、誰も知らないままに終わってしまいます。せっかくの主の十字架が無駄に終わってしまうのです。私たちが喜びと感謝をもって福音を語るならば、福音は人々の中で光を放ち、新しい力となって人間を造り変え、社会を作り変えていきます。

　福音は私たちに委ねられた高価な宝です。私たちは言い表せない感謝をもって、この福音をのべ伝えていきましょう。福音は語られなければ宝の持ち腐れとなってしまいます。感謝をもって福音を語りましょう。そして喜びをもって、救われる人、永遠の命を得る人が起こることを期待しましょう。